柏原市文化財概報　1992-Ⅴ

大　県　南　遺　跡

１９９３年3月

柏原市教育委員会

はしがき

柏原市の埋蔵文化財包蔵地は、市域の３分の２以上を占め、大阪府下でも最も遺跡が集中しているところです。

今回の調査は、当時の古代寺院では日本で３つの指にはいる規模の大きい仏像を擁した知識寺の直ぐ北側にあり、その関連した遺構や遺物或いは豪族の集落があったかも知れません。緩斜面地でありましたが溝や建物の柱穴や生活に使用した土器類や古銭が出土しました。周辺の環境を復元するための貴重な記録です。調査の実施にあたって事業者より文化財の保護と愛護の立場からご理解とご協力を頂いたことに感謝致します。今後一層柏原市の歴史が明らかになることを願うものです。

平成５年３月

柏原市教育委員会

教育長　庖刀和秀

例言

１．本書は、平成４年度に柏原市教育委員会が原因者負担事業として実施した発掘調査の中で大県南遺跡（92－３次調査）における発掘調査概要報告書である。

２．発掘調査は、柏原市教育委員会　社会教育課　文化係　北野　重を担当者として、柏原市太平寺２丁目557－１他の所在地で、平成４年６月22日から同年７月13日の期間実施した。調査に要した諸費用は、依頼者が負担した。

３．調査の実施にあたり、下記の諸氏の参加があった。

藤田昌宏　空山　茂　山田寛顕　安村俊史　石田成年　寺川　款
生駒美洋子　小野洋行　阪口文子　津田美智子　尾野知永子　酒井英利香
山口　剛　椋本徹夫　西島伸彦　松尾洋平　奥野　清　谷口鉄治
分才隆司　乃一敏江　有江マスミ

４．本書の構成、執筆は、北野が行った。

５．本書で使用した標高、方位は、特に注記してないかぎりＴ．Ｐ．と磁北である。

大県南92－次調査

・調査地区所在地　　柏原市太平寺２丁目577－１他

・調査担当者　　北野　重

・調査期間　　平成４年６月３日（試掘調査）

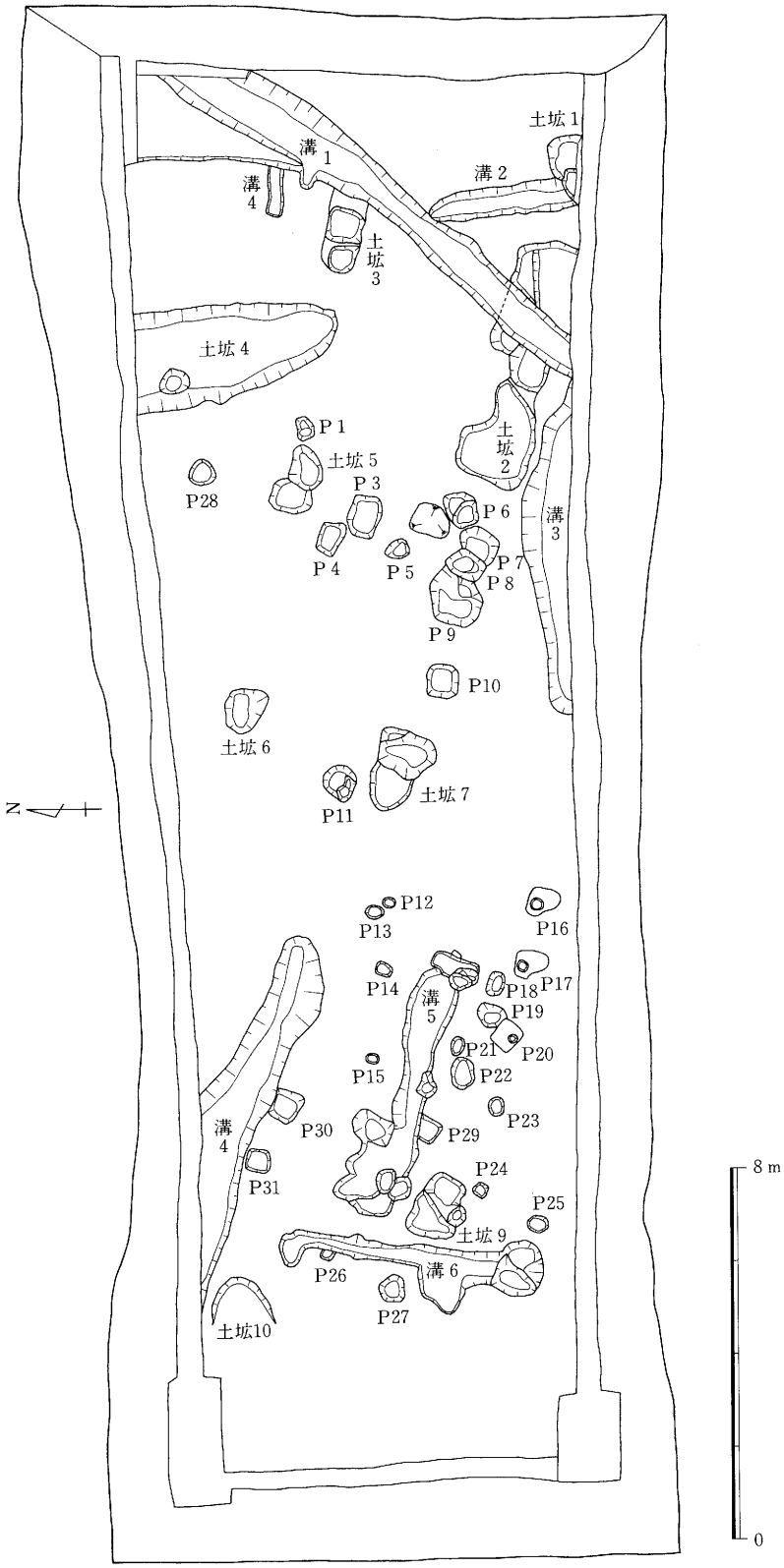
　　平成４年６月22日～平成４年７月13日（本調査）

・調査面積　　445㎡／1,856.06㎡

当地区は、河内六大寺（知識、山下、大里、三宅、家原、鳥坂）のうち知識寺と山下寺の二寺が建立された丁度中程に位置している。知識寺は、東大寺鎮守八幡大神への宣命文の中に『……去辰年（天平十二年）河内国大県郡乃智識寺爾座盧舎那遠礼奉天則朕毛欲奉造止思登毛得不為間……』とあり、聖武天皇が東大寺の大仏が発願される契機となった飛鳥時代中頃に創建された寺である。また、続日本記等の文献にたびたび歴代の天皇がお参りに来られている記述がある。近年の調査にその関連遺物や遺構が検出されている。

この調査は、平成４年４月２日に発掘届出書が提出された。周辺の調査で古墳時代後期から奈良時代にかけての遺構及び遺物が検出されていることから、また、面積が多大であるので遺跡の深度や時期等を確認するために試掘調査を実施した。結果は、地表から0.5～1.1m下層で奈良時代の遺物包含層を確認した。事業者と再度協議行い、本調査を実施したものである。

図－１　調査区位置図


土坑1
溝1
溝2
溝4
土坑3
土坑4
P1
土坑5
P3
P28
土坑2
P6
溝3
P4
P5
P7
P8
P9
P10
土坑6
土坑7
P11
N
P12
P13
P16
P14
溝5
P18
P17
P19
P21
P20
P15
P22
P23
溝4
P30
P29
P31
P24
P25
土坑9
P26
溝6
P27
土坑10
8 m
0

図－2　調査区全体図

調査は、南北方向11m、東西方向33mの約430㎡を調査した。調査区の標高は、東側の最も高い場所で26.9m、西側で最も低い場所で22.8mと比高差4.1mを測る。全体に平坦な場所は少なく西向きの緩斜面である。大きく見れば上段と下段にテラス状の場所があり、遺構が集中している。遺構として溝6条、土抗10、建物の柱穴となるピット多数を検出し、上段は溝1から溝4の南東端部までであり、下段は溝6より西側である。遺物は、土師器、須恵器、製塩土器、古銭、木器等が出土した。時期は、6世紀頃の時期の遺物が若干出土し、7から8世紀にかけての土器が大半を占める集落跡であることが判明した。

溝－1

調査区の東端部を南北方向にほぼ直進して流れる溝である。溝のある位置は、上段のテラスの東側端部にあたる。長さ10.5m以上、南側の幅0.7m、北側は1.3mとやや広くなっている。深さは、0.1～0.4mを測る。埋土は、上層が灰褐色粘質土、下層が青灰色粘質土である。遺物は、土師器（13）が出土した。その他に土師器片25点がある。時期は、7世紀後半から8世紀にかけてである。

溝－2

調査区の南東方向から溝1に流れ込む小溝である。長さ約3m、幅0.7m、深さ0.15mである。埋土は、灰青色砂質土である。遺物は、出土しなかった。調査区の南側には谷筋があり、その分水として流れる溝であろう。

溝－3

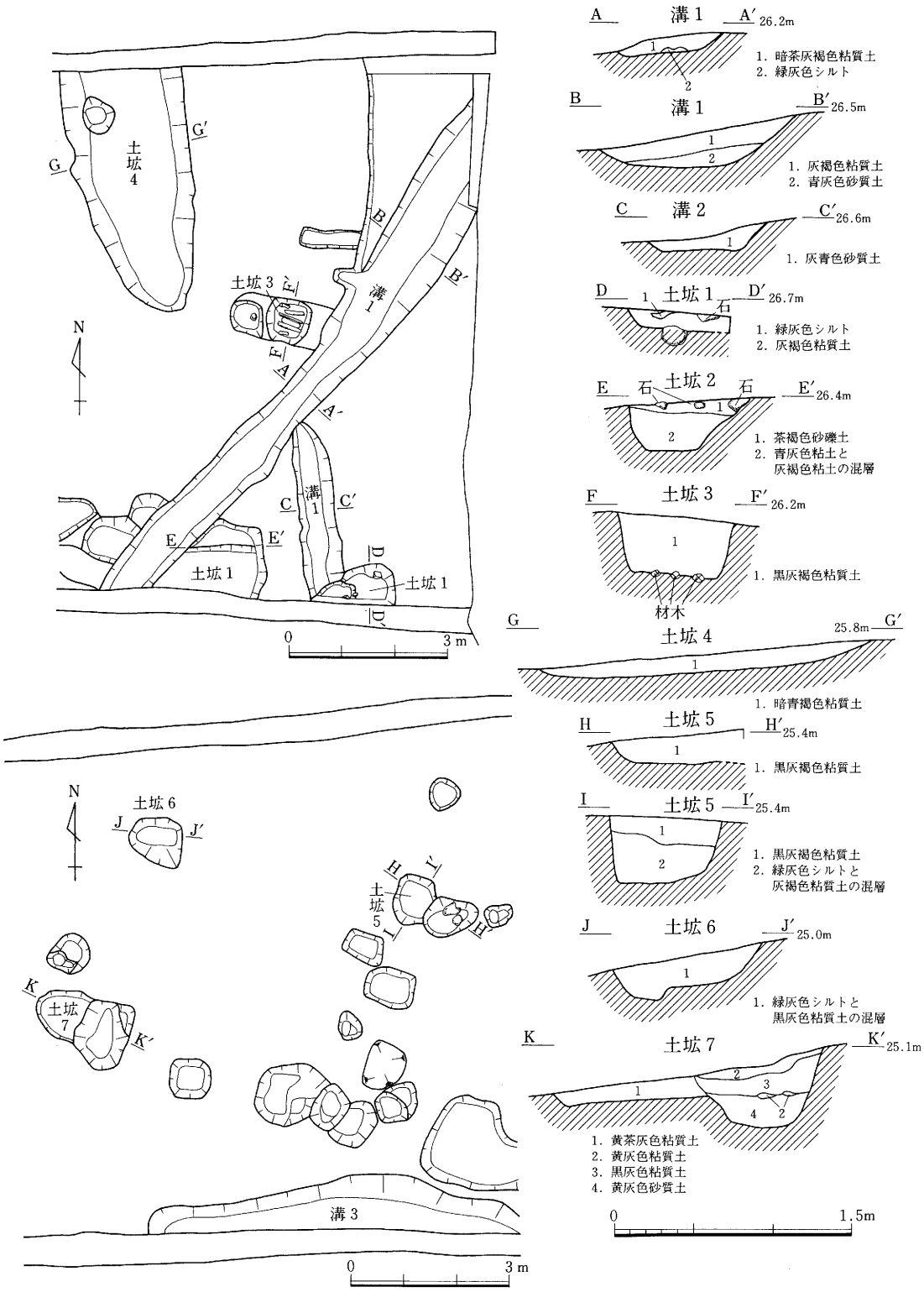
調査区の南側に東西方向に流れる溝である。北側肩部のみ検出した。長さ7m以上である。直ぐ南側には大きな段があり、谷筋から続く大きな溝かも知れない。埋土は、砂礫土が大部分であるが水が淀んだ時に出来るピート層も確認された。遺物は、桃の種子が1ケ出土したのみである。

溝－4

調査区の中央部から始まり北西方向に伸びた谷筋状に広がった溝である。長さ8m以上、幅1～1.5m、深さ0.2mである。この溝の広がる先は、立地の良好な平坦地となっており集落の建物が多数建てられた場所のように見られる。埋土は、黒灰色粘質土である。出土遺物は、土師器、須恵器の破片が少量出土した。これらの遺物は、上方のピット群の建物で生活した人々の廃棄遺物であろう。

溝－5

調査区の西側に東西方向に伸びた両端部が途切れている溝である。溝4と平行しており、一時期関連した段か建物端部の排水用溝であろうか。沢山のピットや土抗にきられている。規模は、長さ5.5m、幅0.5m～1.1m、深さ0.15mである。遺物は、土師器、須恵器、獣骨が出土した。


土坑4
G
G′
土坑3
F
F′
溝1
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
土坑1
N
0
3 m
溝1
A
A′
26.2m
1. 暗茶灰褐色粘質土
2. 緑灰色シルト
溝1
B
B′
26.5m
1. 灰褐色粘質土
2. 青灰色砂質土
溝2
C
C′
26.6m
1. 灰青色砂質土
土坑1
D
D′
26.7m
石
1. 緑灰色シルト
2. 灰褐色粘質土
土坑2
E
E′
26.4m
石
1. 茶褐色砂礫土
2. 青灰色粘土と
灰褐色粘土の混層
土坑3
F
F′
26.2m
1. 黒灰褐色粘質土
材木
土坑4
G
G′
25.8m
1. 暗青褐色粘質土
土坑5
H
H′
25.4m
1. 黒灰褐色粘質土
土坑5
I
I′
25.4m
1. 黒灰褐色粘質土
2. 緑灰色シルトと
灰褐色粘質土の混層
土坑6
J
J′
25.0m
1. 緑灰色シルトと
黒灰色粘質土の混層
土坑7
K
K′
25.1m
1. 黄茶灰色粘質土
2. 黄灰色粘質土
3. 黒灰色粘質土
4. 黄灰色砂質土
0
1.5m
土坑6
J
J′
土坑5
H
H′
I
I′
土坑7
K
K′
溝3
0
3 m

図－3　各遺構と断面

溝－6

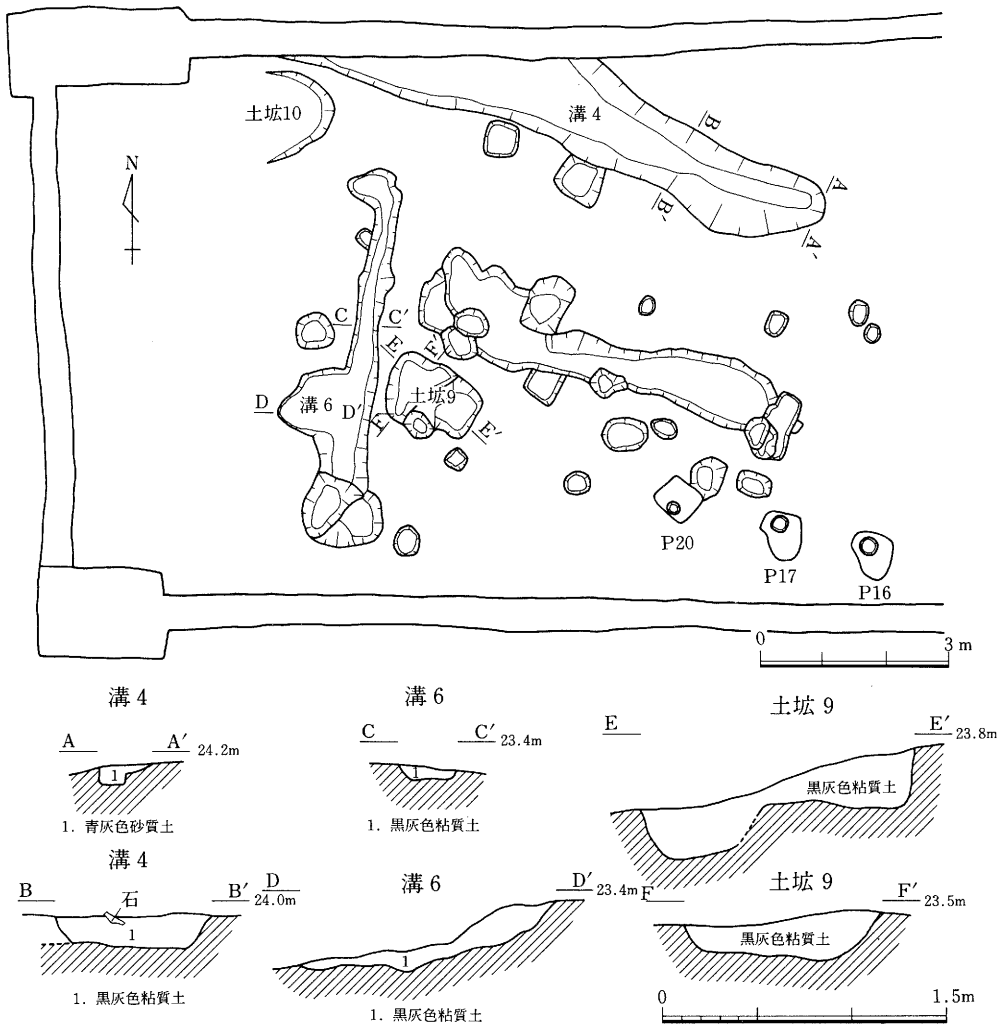
溝－5の直ぐ西側に南北方向に伸びた溝である。長さ4.5m、幅0.3～0.7m、深さ0.2mを測る。土師器、須恵器が出土した。

土抗－1

溝－2の南側に検出したもので幅0.7～1.5m、深さ0.1mである。埋土は、灰褐色粘質土である。須恵器が1片出土した。

土抗－2

溝－1にきられた方形の土抗である。長さ1.3～3.2m、深さ0.3mを測る。埋土は、上層が茶褐色砂礫土、下層が青灰色粘土と灰褐色粘土の混層である。出土遺物はなく、時期が明確でないが7世紀中頃以前である。



図－4　各遺構と断面

土抗－3

溝－1の北西部から西側にピットが2ケ並んだ土抗である。東側のピットは、径0.7m、深さ0.35mで下層に3本の板材を平行に並べ、両端に2本の杭を立てている。西側のピットは、径0.6m、深さ0.25mを測り、中央部に柱痕が遺存している。

土抗－4

調査区東側の中程から北側に伸びる大きな土抗である。長さ4.3m、幅2.1m、深さ0.1mを測る。埋土は、黒灰褐色粘質土で炭を多く含んでいた。遺物は、出土しなかった。

土抗－5～9

調査区の中央部に規模が0.5～1.8mを測る各自形の土抗である。埋土は、黒灰褐色粘質土を多く含んだ土層で10㎝大の小石が割合多く見られた。ピットが重なったものもあり、集落に関連した遺構であろう。遺物は、実測に耐えるものが少ないが土師器、須恵器が、出土した。

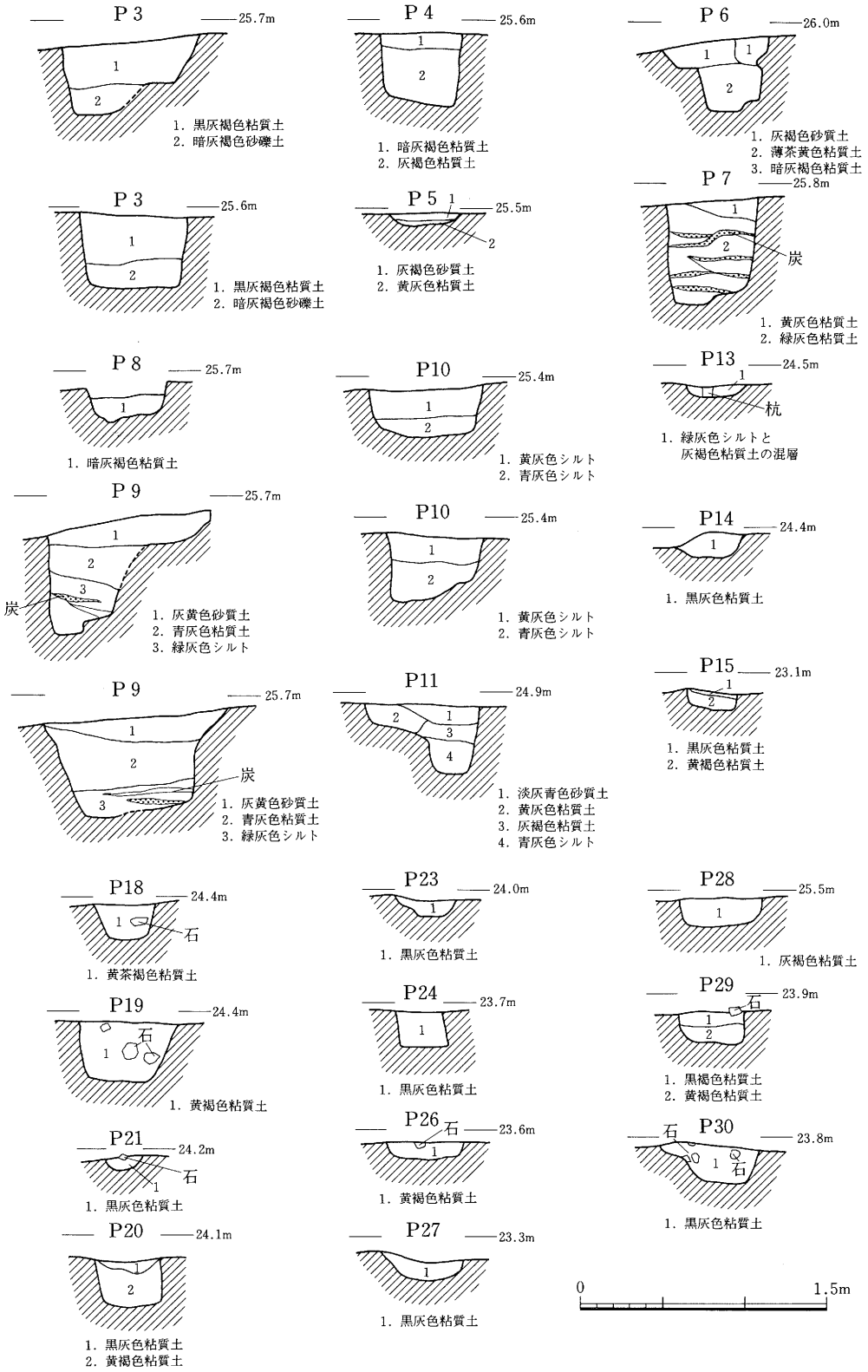
土抗－10

調査区の西側下段の平坦地から検出した土抗である。径1.0～1.2m、深さ0.1mである。埋土は、すべて炭で充満して、下層は酸化焼成を受けている。周辺には鉄滓が出土し、鍛冶に関わる遺構の可能性も考えられる。

その他の遺構は、ピットが多数出土した。P16、17、20がほぼ直線的にのびており、建物の可能性がある。方形の掘方断面の中に円形の柱痕を認めた。柱間は、1.5mである。南側へ続く建物かも知れない。

須恵器（1～8）

須恵器の出土は、土師器の出土よりやや少ない。種類は、杯蓋は、（1～3）、杯身（4～6）瓶（7）、壺（8）、瑤（9）がある。時期は、6世紀後半から7世紀後半にかけての範囲に入る。1は、天井部に擬宝珠様つまみが付き、内面に小さく接地面よりやや上方にかえりが付いている。口径が8.3㎝、2.9㎝である。天井部に回転ヘラ削りが施されている。陶邑編年第Ⅲ様式1段階の7世紀中頃である。2は、天井部に扁平な擬宝珠様つまみがあり、内面に小さなかえりを付けている。口径10.2㎝、器高2.8㎝である。3は、さらに扁平になった擬宝珠様つまみで内面にわずかに小さなかえりが付く。口径11.7㎝、器高3.1㎝である。Ⅲ型式2段階の土器である。4は、底部が平らで口縁が真直ぐ外方に伸び端部が尖り気味で逆台形状の杯身である。口径10.7㎝、器高4.0㎝である。第Ⅲ型式2段階の土器である。5は、口縁が内湾して短くたちあがを持つ杯身である。口縁端部が丸く終わり底部が欠損しているが回転ヘラ削りがある。口径11.9㎝である。6は、5と同様に杯身である。第Ⅱ型式5又は6段階である。7は、小型の瓶で、口縁が外反して端部が外方に肥厚して断面三角形を成す。外面はカキ目調整である。8は、壺の口縁部が短く立上がり端部を上方につまみあげる。9は、肩部が大きく


P 3
25.7m
1. 黒灰褐色粘質土
2. 暗灰褐色砂礫土
P 4
25.6m
1. 暗灰褐色粘質土
2. 灰褐色粘質土
P 6
26.0m
1. 灰褐色砂質土
2. 薄茶黄色粘質土
3. 暗灰褐色粘質土
P 3
25.6m
1. 黒灰褐色粘質土
2. 暗灰褐色砂礫土
P 5
25.5m
1. 灰褐色砂質土
2. 黄灰色粘質土
P 7
25.8m
炭
1. 黄灰色粘質土
2. 緑灰色粘質土
P 8
25.7m
1. 暗灰褐色粘質土
P10
25.4m
1. 黄灰色シルト
2. 青灰色シルト
P13
24.5m
杭
1. 緑灰色シルトと
灰褐色粘質土の混層
P 9
25.7m
炭
1. 灰黄色砂質土
2. 青灰色粘質土
3. 緑灰色シルト
P10
25.4m
1. 黄灰色シルト
2. 青灰色シルト
P14
24.4m
1. 黒灰色粘質土
P 9
25.7m
炭
1. 灰黄色砂質土
2. 青灰色粘質土
3. 緑灰色シルト
P11
24.9m
1. 淡灰青色砂質土
2. 黄灰色粘質土
3. 灰褐色粘質土
4. 青灰色シルト
P15
23.1m
1. 黒灰色粘質土
2. 黄褐色粘質土
P18
24.4m
石
1. 黄茶褐色粘質土
P23
24.0m
1. 黒灰色粘質土
P28
25.5m
1. 灰褐色粘質土
P19
24.4m
石
1. 黄褐色粘質土
P24
23.7m
1. 黒灰色粘質土
P29
23.9m
石
1. 黒褐色粘質土
2. 黄褐色粘質土
P21
24.2m
石
1. 黒灰色粘質土
P26
石
23.6m
1. 黄褐色粘質土
石
P30
23.8m
石
1. 黒灰色粘質土
P20
24.1m
1. 黒灰色粘質土
2. 黄褐色粘質土
P27
23.3m
1. 黒灰色粘質土
0
1.5m

図－5　各遺構と断面

張った瑳で土抗４から出土した。肩部の最大径に円孔があり、頸部径は、胴部の1/2以下である。模様帯は、頸部に波状文、円孔位置に２本の凹線が巡りその間に櫛描刺突文、その下方にカキ目調整がある。底部と内面は、ナデ調整である。内底面指押痕が見られる。これらの須恵器は、色調が灰色又は青灰色のもので胎土は精良である。１～６は、７世紀代、７～９は、６世紀代の遺物であろう。

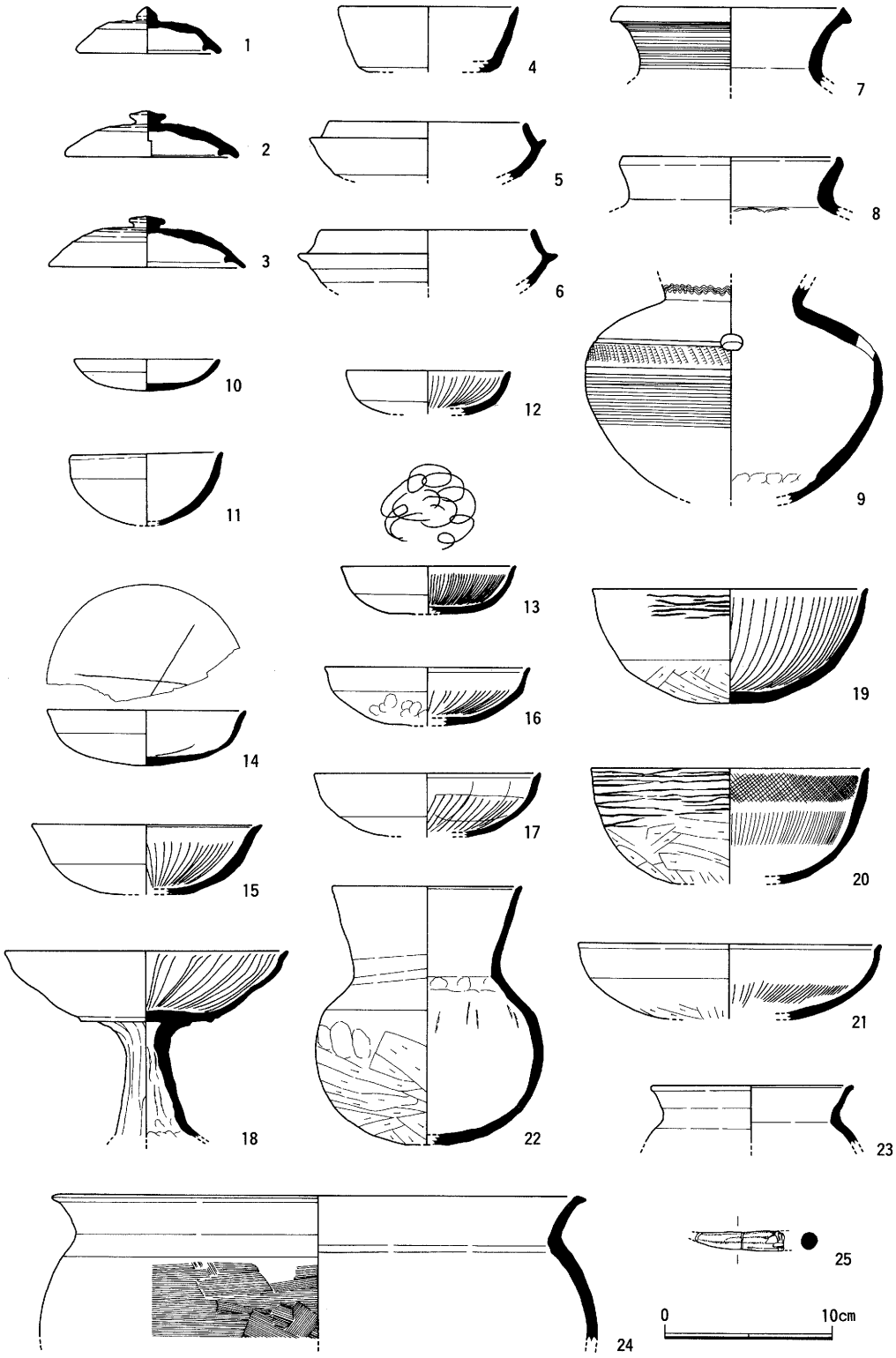
土師器（10～24）

土師器は、杯（10～17、21）、高杯（18）、椀（19、20）、壺（22）、瓶（23）、鉢（24）がある。

10は、口径8.7㎝、器高1.9㎝の小皿である。遺物包含層から出土した中世の時期の遺物である。11は、半球状の形態で口縁端部が少し外反する。口径9.1㎝、器高4.4㎝である。内外面指ナデ調整である。12は、内面に放射状暗文の杯である。13は、溝１から出土したもので、内面に放射状暗文と螺旋暗文があり口縁の内側端部に僅かな段がある。口径10.5㎝、器高1.9㎝を測る。14は、口縁端部が僅かに外反する杯で、暗文がなく内底面に×のヘラ記号がある。調整は、指ナデである。15は、内面に放射状暗文を付け、口縁端部が外側に折り曲げ内傾する面を持つ。16は、体部に２ケ所の屈曲部があり口縁端部が外反する杯である。内面に放射状暗文を持つ。外底面には指押え痕が顕著に見られる。17は、口縁内側に段を有する杯で、内面に放射状暗文がある。また、＃の字形のヘラ記号がある。製作時に付けたものではなく使用時の痕跡である。18は、段の持つ高杯である。口縁端部が内傾する面を持ち幅のある放射状暗文が施されている。脚部は、端部が欠損しているがラッパ状に開くものである。19は、半球形の体部の椀である。口縁端部が内傾する面を持ち、内面に放射状の暗文と外面にヘラ磨き施している。外底部にヘラ削りが見られる。口径16.6㎝、器高6.9㎝である。20は、やや安定性のある椀で、口縁端部が内傾面を持っている。内面に２段の放射状暗文を付け外面上半部に密なヘラ磨き、下半部にヘラ削りを施している。12は、大型の杯で、口縁端部が外方に小さく屈曲している。内面に放射状の暗文があり、外底面にヘラ削りを施している。23は、小型の瓶である。体部と口縁の境がくの字に屈曲している。端部は、外方に小さく折り曲げる。24は、鉢である。体部と口縁がくの字形を成し口縁端部が外下方に折り曲げられている。内外面ナデ調整であるが体部外面は、細かなハケ目が見られる。これらの遺物は、胎土が砂粒を少し含むが精良なもので、色調は黄灰色、橙褐色である。10の皿は、中世の時期の遺物で、これ以外の遺物は、７世紀中頃以降のものであろう。

その他の遺物

その他の遺物として、刺突具、フイゴ羽口、製塩土器、鉄滓、古銭、木片、種子がある。25は、骨製の刺突具である。両端が欠損して未完成のようである。縦方向の削りと横方向の線状



図－6　出土遺物

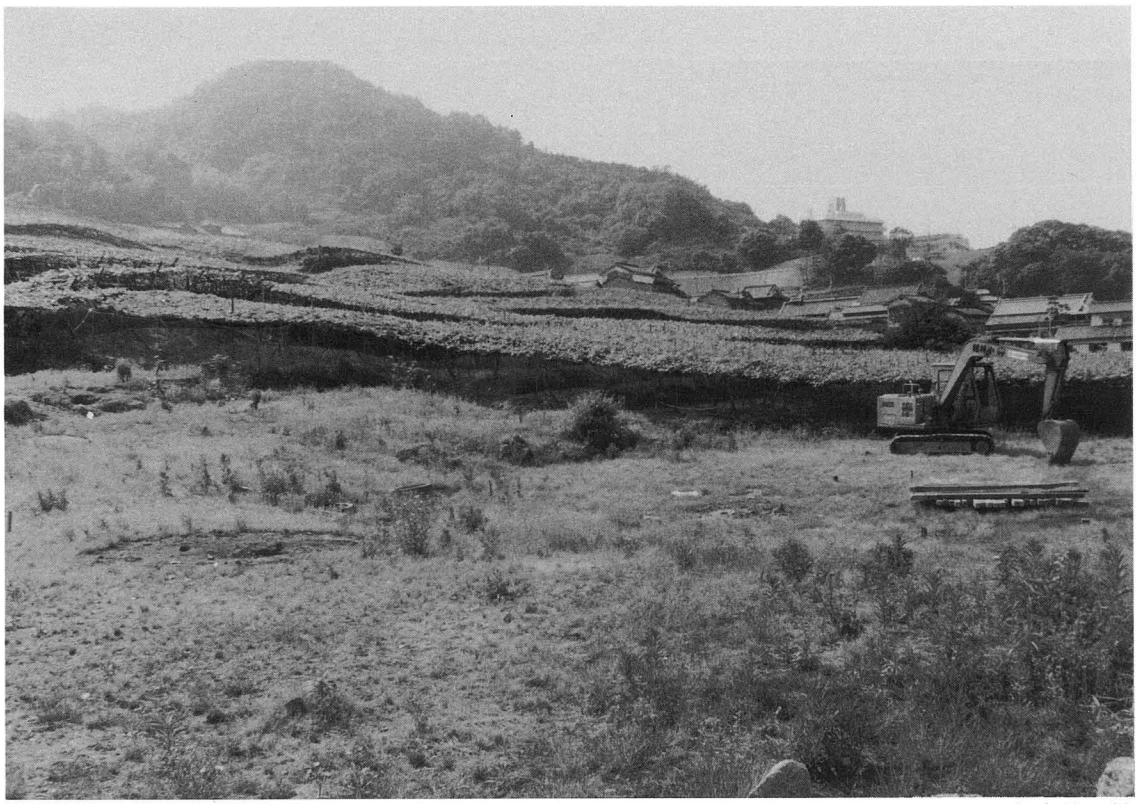
の溝がある。長さ5.4㎝、径1.3㎝である。フイゴ羽口は、破片で１点出土している。製塩土器は、破片化してるが厚く仕上げのコップ形の土器と口縁が内湾し径10㎝位の丸い体部の２種類がある。鉄滓は、遺物包含層から10点出土した。総重量が322.8ｇである。古銭は、和同開珎１枚である。木器は、土抗１の底部に敷いた加工木と建物柱として使用された柱痕の遺りである。種子は、桃１点である。

まとめ

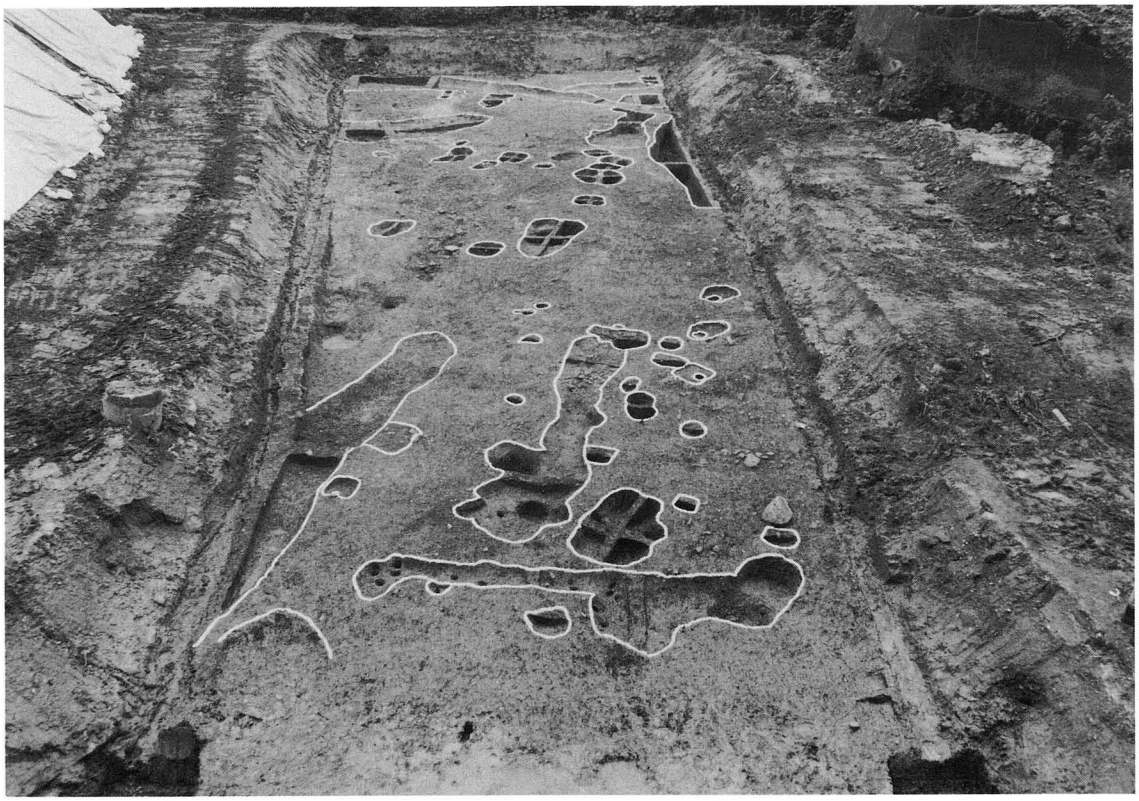
今回の調査で判明した事実から若干の検討を加えまとめとしたい。大県南遺跡は、縄文時代から歴史時代までの集落遺跡であるが、その中心となる場所は、岩崎谷から広がる扇状地の上にある。調査区の位置は、古代集落の中心からやや南側の天冠山の西側山裾部にあたり、知識寺や山下寺の中間よりやや南側に位置している。

遺構は、溝、土抗、建物の柱穴となるピット群が検出された。これらの遺構は、集落の造成時に掘られた当時の人工的な溝か土抗等である。溝１～４は、緩斜面地にあって集落内の周りに巡らした排水用の溝または農耕に供した溝の一部であろう。溝５、６も同様の溝かも知れない。これらの溝は、テラス状になった端部や自然地形に則した場所にあり、東西方向と南北方向を向いて流れている。建物は、今回の調査で検出しなかった。２、３ケのピットの並びを確認することが出来るが整然としない。時期が６世紀から奈良時代まであり、何回もの建替えが行われていたものと考えられる。

遺物は、６世紀の後半から中世までの時期のものが出土した。須恵器は、杯身蓋、瓶、壺、瑳がある。身は、受部があるものとないものがある。前者は、破片でも多く出土しているが、後者は、少ない。蓋は、すべてつまみが付いている。つまみがないものもある可能性があるが破片で身と区別出来ないものが多い。これらは、６世紀末から７世紀後半以降の時期である。土師器は、７世紀の杯、椀、高杯、壺、瓶等の生活に供した遺物がほとんどである。全体に破片が多く出土量に比べて実測出来た遺物が少なかった。杯は、内面に放射状暗文を付けるものが多く、口縁端部が外方に折り曲げるものである。雑な仕上げで調整の手数や丁寧さが省略されているものもある。反面、椀は、杯と同様の時期のものであるが外面にヘラ磨きを丁寧に施している。数の少ないものにヘラ磨きの密な調整を加えて付加価値を付けたものであろうか。これまで多くの調査を実施してきたが古墳時代の後期に大規模な集落に変革していることが判明してきた。西側向き緩斜面にあたり、現在でも果樹園や耕作のため段々畑に造成されているが、それまで平野の部分だけに限られていた生活住区が山の斜面の利用へと開発が進んだ結果である。この集落の拡大が鉄器生産集団の移住が考えられており、フイゴ羽口や鉄滓が当調査区からも出土し、鉄器生産を行う鍛冶集団が存在した１資料の追加となった。

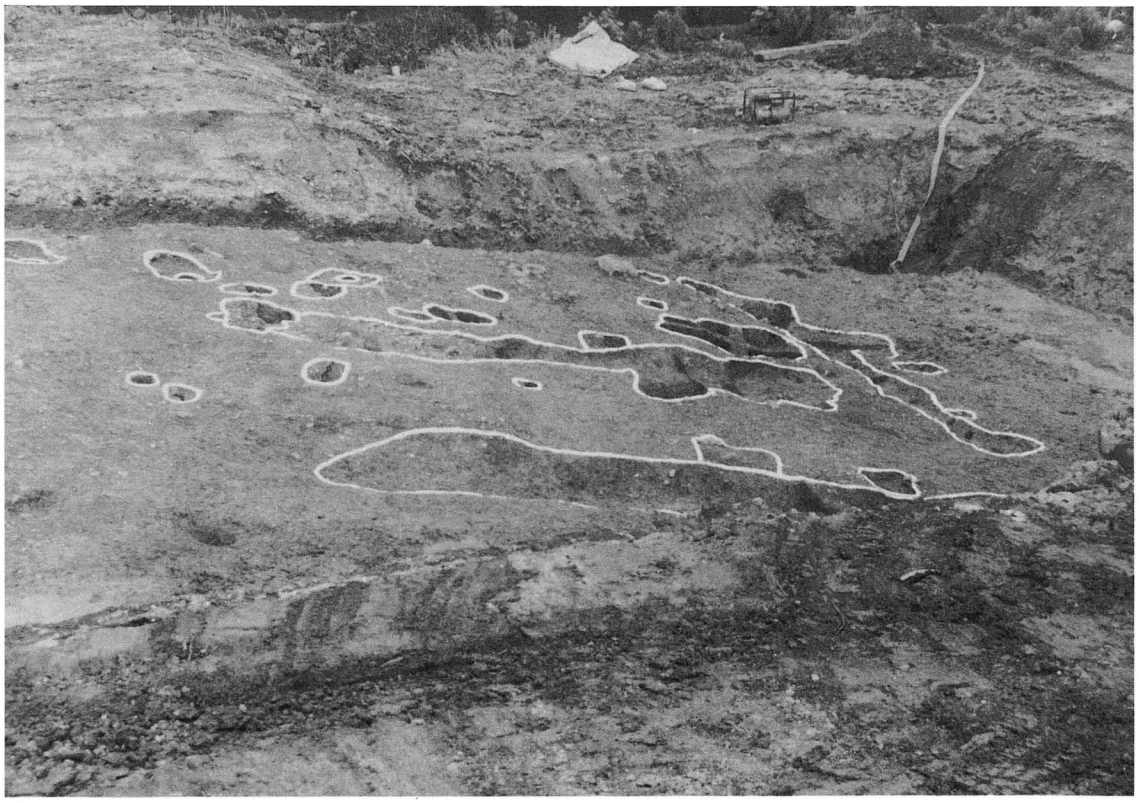


調査前風景



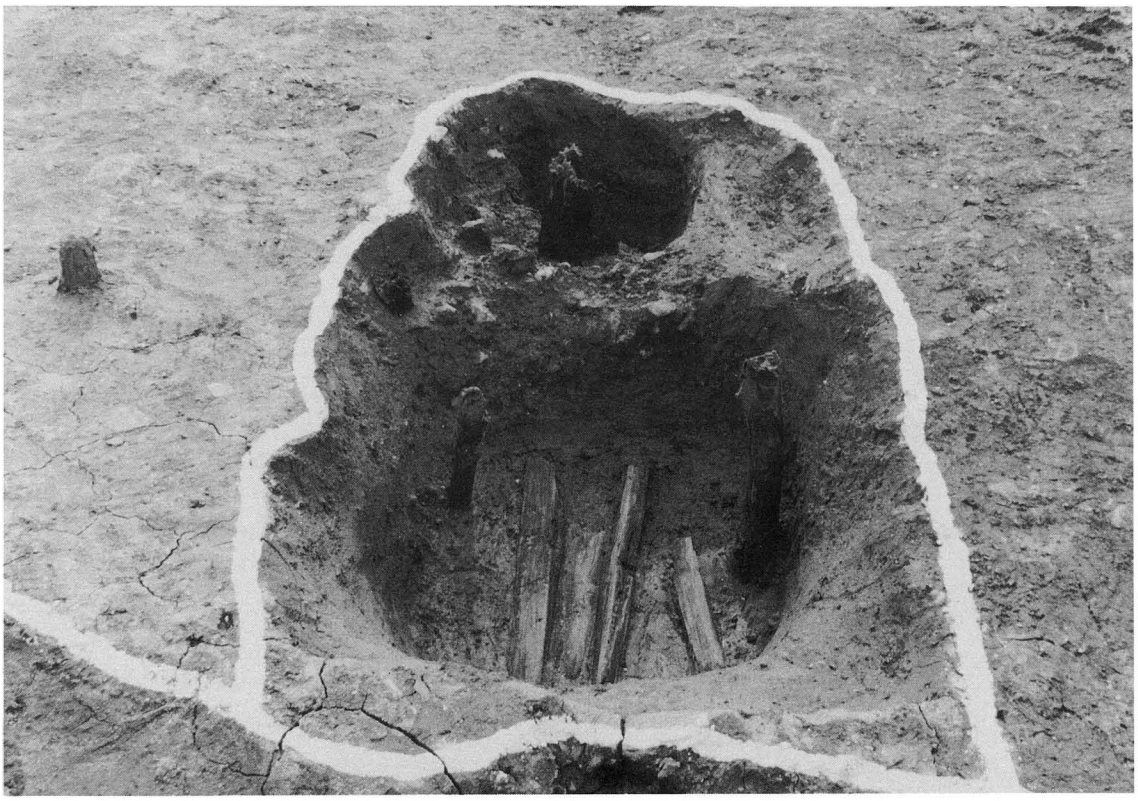
調査区全景

調査区東側



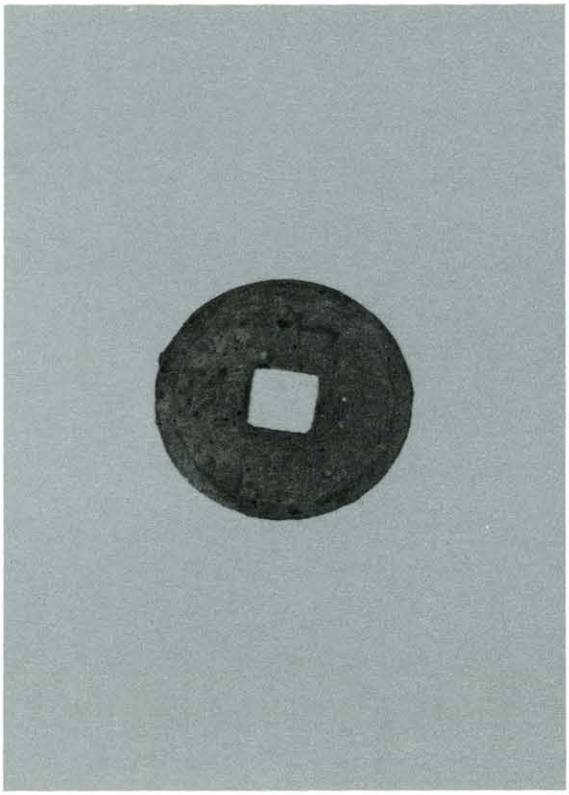
調査区西側

土抗３（南から）

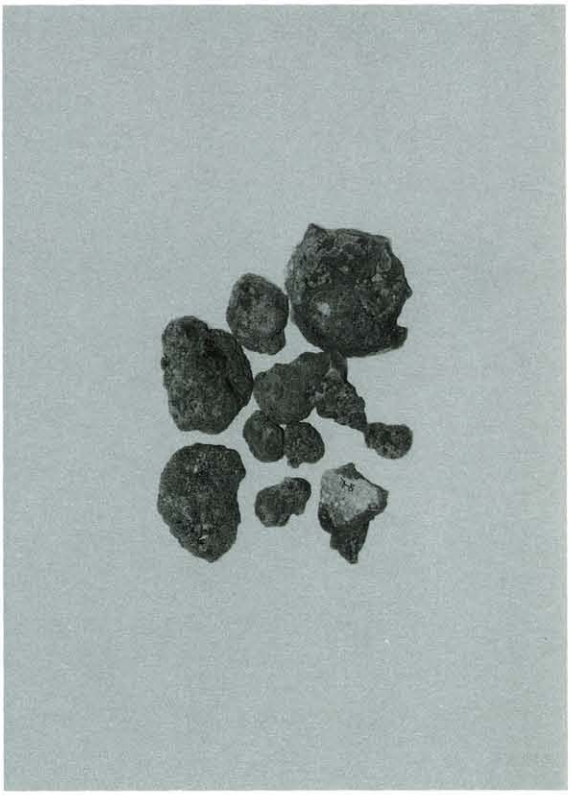


土抗３（西から）

出土土器



和同開珎



鉄滓